軍王（こにきしのおほきみ）の詠んだ不思議な歌

山口孝晴

一

万葉集は二〇巻から成る歌集であるが、その二〇巻は同じ時期に編まれたものではなく、編集のあり方も一貫したものではない。中でも巻一に収める「雑歌」集、巻二に収める「相聞・挽歌」集は、最初の段階で編まれたものであり、独自の編集がなされている。両巻とも、天皇の御代ごとに時代を設定し、その時代に詠まれた歌を、およそ年代順に配置している。その巻一に、次の歌が置かれている。軍王（こにきしのおほきみ）の作と記された歌であり、舒明天皇の時代に置かれている。この歌に考察を加えてみたい。この歌は不思議な要素を持つ歌であり、その不思議さをたずねていく時、万葉集という歌集について、あらためて考えねばならない状況になるのである。

讃岐国の安益郡（あやのこほり）に幸（いでま）す時に、軍王、山を見て作る歌

五　霞立つ　長き春日の　暮れにける　わづきも知らず　むらきもの　心を痛み　ぬえこ鳥　うらなけ居れば　玉だすき　かけの宜しく　遠つ神　我が大君の　行幸（いでまし）の　山越す風の　ひとり居る　我が衣手に　朝夕に　かへらひぬれば　ますらをと　思へる我も　草枕　旅にしあれば　思ひ遣る　たづきを知らに　網の浦の　海人娘子（あまをとめ）らが　焼く塩の　思ひそ焼くる　我が下心

反歌

六　山越しの　風を時じみ　寝る夜落ちず　家なる妹を　かけて偲ひつ

まず、題詞に触れてみたい。題詞自体に不自然な点、或いは不可解な点が見られるのである。一点ずつ次に示す。

①、「讃岐国の安益郡に幸す時に」と記されている。この歌は舒明天皇の時代に置かれている。しかし、舒明天皇が讃岐国に行幸をしたという記録はない。日本書紀では舒明十一年（六三九）に伊予国に行幸をしたという記録は残している。しかし讃岐国への行幸の記録はない。何らかの事情で載せなかったことも考えられるが、不自然なことだ（五～六歌に添えられた注でこのこと触れているが、注については後で述べる）。

②、作者は軍王と記されている。伝不詳の人物であり、この名は当時朝鮮半島にあった百済に由来すると言う。従って、軍

王は帰化人である可能性が高い。帰化人にこの歌に見るような、複雑な文脈を持つ歌が詠めるであろうか。

③、「山を見て作る歌」と記されている。しかし、この歌は山を見て詠んだ歌ではない。旅先で都を思い、妻を偲んだ歌である。題詞と歌の内容が一致していないのである。

題詞に見る疑問として、以上の三点があげられる。事実に基づいて詠んだ歌なのか、作者はどういう人物なのかなど、歌の根幹にかかわる疑問である。

次に歌の詠み方に触れたいと思う。万葉集に収められた歌は、口誦歌から記載歌へという流れを辿っている。この歌は、表現、形式、修辞法等から考えて、記載歌であると判断できる。論の展開上、ここでは歌の表現に関して一点指摘し、記載歌であることを確認したい。歌中に「かけの宜しく」という表現が見られる。この言葉はその後七句を隔てて「かへらひぬれば」に掛かっている。しかも、その掛かり方は「かへらひぬれば」の「かへら」を掛詞として掛かっている。この部分を要点のみ解釈するならば、「掛詞として具合のいいことに『かへらひぬれば』の『かへら』には『都に帰る』の意もあって、言葉の上では宜しいのだが」となる。「かけの宜しく」の「かけ」自体が掛詞の働きをなしており（傍線部）、それが「かへらひぬれば」を掛詞として掛かっているのである。「かけの宜しく」と「かへらひぬれば」の間に七つの句を挟み、掛詞を巧みに活かしている。それでいて文脈はしっかりしており、乱れはない。ここに見る工夫された表現は、記載歌にして初めて可能であると言っていい。つまり、この歌は記載歌であると判断できるのである。

さて、五～六歌が記載歌であるということは、何を意味しているのか。この歌は舒明天皇の時代（六二九～六四一年）に置かれている。万葉集に収められた歌の初期の段階に当たる。その時期は口誦歌の時代であり、記載歌が完成したのは六〇〇年代の末期である。万葉歌の中で、私たちは柿本人麻呂の歌に、まずその完成した姿を見ることができる。人麻呂は六〇〇年代の末期に宮廷歌人として活躍している。人麻呂によって記載歌は完成されたと考えられるのである。また、記載歌が完成に至る過程は、万葉仮名の発達する過程でもあったと言えよう。六三〇年代の頃は、万葉仮名の歴史の上でも、ごく初期の段階であったと思われる。従って、いかなる天才であれ、六三〇年代の頃に、文字文化の歴史を越えて記載歌を作ることは、不可能であると言っていい。六〇〇年代の末期を待たなければ、記載歌の存在はあり得ないのだ。であれば、記載歌である五～六歌が六三〇年代の頃に置かれていることは、どのように受け取ればいいのか。不思議な存在としか言いようがない。この歌の存在は、私たちに大きな謎を投げかけているのである。

五～六歌が舒明天皇の時代に置かれていることを、一般の注釈書等では、どのように扱っているのか。四点ほどを次に示す。

①、日本古典文学大系（岩波書店）

記載歌であることには触れていない。

②、日本古典文学全集（小学館）

記載歌であることには触れていない。

③、万葉集注釈―澤瀉久孝著（中央公論社）

～この作には対句がなく、枕詞を多く用ゐ、序詞もあり、句数（二九句）も人麻呂以前のものとしては最も多く、結句がはじめて五・七・七の形になってゐる事も注意せられ、形式技巧の点からも内容の上からも、明らかに口誦文学としての歌謡から記載文芸としての長歌になった最初のものとして認められる。

④、万葉集必携―稲岡耕二編（学燈社）

～「ぬえこ鳥」「玉だすき」など人麻呂の創始に成ると思われる枕詞を含み、さらに「遠つ神　我が大君」には大化以後、天武朝以後の現神思想の反映も見られて到底舒明朝の作品とは考え難い（稲岡耕二「軍王作歌の論」『国語と国文学』昭48・5）。歌の形式も初期万葉には珍しい五七定型に整備されており（窪田評釈・武田全注釈など）、持統朝以後の作が誤って前代の歌のなかに配列されたものと推測される。

右の如くである。簡単に振り返るならば、私たちが一般に目にする古典文学全集では、記載歌であることには全く触れていない。代表的な万葉学者である澤瀉久孝は「口誦文学としての歌謡から記載文芸としての長歌になった最初のもの」と言っているが、「記載文芸としての長歌」の完成は、六〇〇年代の末期であり、それが六三〇年代の頃に置かれていることの矛盾については、何も触れていない。最後にあげた「万葉集必携」では、「持統朝以後の作が誤って前代の歌のなかに配列されたもの」と述べている。この説明であれば、矛盾は一応解消される。また、「天武朝以後の現神思想の反映も見られて」という指摘は、この歌が持統朝以後の作であることの確かな根拠と言えよう。しかし、「誤って前代の歌のなかに配列する」などというミスがあるだろうか。

私は五～六歌は誤って舒明天皇の時代に置いたものではないと思う。もちろん、六三〇年代の頃に記載歌が作られようはずもない。私は五～六歌は七〇〇年代の初めの頃に作られたものであり、それが編者によって、敢えて舒明天皇の時代に置かれたものだと考えている。もし、舒明天皇の時代に敢えて置いたものであるのならば、それは歌集編集の枠を越えて、歌集に一つの工作を施したとも言えるものだ。そのようにとらえることは、万葉集を冒涜するものだと言われるかもしれない。しかし、いくつかの視点からとらえる時、七〇〇年代の初めの頃に作られた五～六歌を、舒明天皇の時代に敢えて置いたという結論に至るのである。そして、そのようにとらえることは、万葉集を冒涜するものでは決してなく、そのようにとらえて初めて、万葉集がいかに貴重な歌集であるのかが明らかになるのである。以下、私が右の判断に至った根拠を示す。

二

記載歌の完成は当時の歌人たちにとって賞賛すべき、偉大な業績であったと思われる。口誦歌から記載歌へという過程は、文学誕生の過程でもある。先に、記載歌を完成させたのは人麻呂であると述べたが、人麻呂は六九〇年の前後に、かつて都であった近江大津京を訪ねて、歌を詠んでいる。「～霞立ち　春

日の霧れる　ももしきの　大宮所　見れば悲しも」と詠んだ長歌一首と反歌二首から成るこの歌は、記載歌としての美しさを極めた作品と言っていい。この歌によって、当時の人は初めて文学の与える感動を知ったと言ってもいいかもしれない。この歌は五～六歌の少し後に置かれている。歌番号は二九～三一である。編者はこの歌を記載歌を代表する作品であるという認識のもとに置いたに違いなく、その編者が同じ記載歌である五～六歌を、誤って舒明天皇の時代に置くという間違いを犯すであろうか。そんなことはあり得ないと私は思う。

私は単に推測しているのではない。七〇〇年代の初めの頃に作られた五～六歌を六三〇年代の頃に敢えて置いたものだとする私のとらえ方に、客観性をもたらす根拠を私は見出している。その根拠を述べたい。

五歌の後半に「ますらをと　思へる我も　草枕　旅にしあれば」という表現が見られる。この表現は万葉歌に親しむ人にとって、なじみのある表現である。柿本人麻呂の「石見相聞歌」に、次の一節がある。

一三五　～天伝ふ　入日さしぬれ　ますらをと　思へる我も～

また、有間皇子の歌に、次の一首がある。

一四二　家にあれば　笥に盛る飯を　草枕　旅にしあれば　椎の葉に盛る

人麻呂の歌と有間皇子の歌の一部が、五歌の中に見られるのである。当然、それは偶然の一致に過ぎないものと思ったが、五歌の冒頭部を見ていて、そこに見る表現もどこかで見たような気がした。そして、私は次に示す事実を知った。この事実は、五～六歌は舒明天皇の時代に敢えて置いたものだとする私のとらえ方を、確かなものとすることになる。次に示す五～六歌の傍線部と、後記の歌を見比べていただきたい。

五　霞立つ　長き春日の　暮れにける　わづきも知らず　むらきもの　心を痛み　ぬえこ鳥　うらなけ居れば　玉だすき　かけの宜しく　遠つ神　我が大君の　行幸の　山越す風の　ひとり居る　我が衣手に　朝夕に　かへらひぬれば　ますらをと　思へる我も　草枕　旅にしあれば　思ひ遣る　たづきを知らに　網の浦の　海人娘子らが　焼く塩の思ひそ焼くる　我が下心

反歌

六　山越しの　風を時じみ　寝る夜落ちず　家なる妹を　かけて偲ひつ

イ　霞立つ　春の長日を　恋ひ暮らし　夜も更けゆくに　妹も逢はぬかも（一八九四・人麻呂歌集）

ロ　～我が衣手に　秋風の　吹きかへらへば～たどきを知らに　むらきもの　心いさよひ～（二〇九二・作者不詳）

ハ　ひさかたの　天の川原に　ぬえ鳥の　うらなけましつ　すべなきまでに（一九九七・人麻呂歌集）

ニ　児らが名に　かけの宜しき　朝妻の　片山崖に　霞たなびく（一八一八・人麻呂歌集）

ホ　住吉の　岸の松原　遠つ神　我が大君の　幸行処（二九五

・角麻呂）

ヘ　～天伝ふ　入日さしぬれ　ますらをと　思へる我も～
（一三五・人麻呂）

ト　家にあれば　笥に盛る飯を　草枕　旅にしあれば　椎の葉に盛る（一四二・有間皇子）

チ　網引する　海人とか見らむ　飽の浦の　清き荒磯を　見に来し我を（一一八七・人麻呂歌集）

リ　天雲の　たなびく山の　隠りたる　我が下心　木の葉知るらむ（一三〇四・人麻呂歌集）

ヌ　我が心　ともしみ思ふ　新た夜の　一夜も落ちず　夢に見えこそ（二八四二・人麻呂歌集）

ル（二）　～振りさけ見つつ　玉だすき　かけて偲はむ　恐くありとも（一九九・人麻呂）

右に見る通り、五～六歌に用いられた表現の多くは既成の歌に見られるのである。しかも、右に示した人麻呂歌集歌は人麻呂作と判断できるので、十一首中八首は人麻呂作ということになる。そして、五～六歌がこれらの人麻呂作歌よりも前に作られた可能性はないと言っていい。たとえば、歌中に見る枕詞「玉だすき」は、先に示した「万葉集必携（稲岡耕二編）」で「人麻呂の創始になる枕詞」と指摘されていることからも、それは明らかだ。つまり、五～六歌は主として人麻呂作歌を基として作られたものだと判断できるのである。なお、ロとホの歌については作歌時期がわからず、五～六歌の影響のもとに作られた可能性があるので、ここでは除外したい。

五～六歌が人麻呂の歌に基づいて作られていることを、編者は当然知っていたと思われる。当時を代表する歌人、人麻呂の歌に見る言葉が、断片的であれこれほどに使われていれば、気付かぬはずはなかろう。であれば、編者は五～六歌を間違って舒明天皇の時代に置くはずはなく、何らかの意図をもって、敢えて置いたものだという結論に至るのである。

右に示す根拠は、五～六歌は舒明天皇の時代に敢えて置かれたものだとする私のとらえ方を、確かなものにするに十分だと思う。それだけでなく、人麻呂の歌を基として作られていることは、この歌の位置付けをあらためて問い直さねばならず、それはこの歌集の根幹を問うことになろう。私は最初に題詞について三つの疑問を呈している。その中の一つは作者軍王に関するものだ。帰化人を思わせる軍王が作者であることに、私は疑問を抱いた。今、五～六歌が人麻呂作歌に基づくことが明らかになった以上、軍王を作者としてそのまま受け止めることはできない。一般に言う「作者」は存在しないのである。それだけではない。この歌が意図的に作られたものであれば、記録にない讃岐国への行幸自体、実際に行われたものなのか、疑わしいと言わねばならない。つまり、この歌は或人物によって、何らかの目的のために考案された歌ではないかと考えられるのである。この歌は誰によって、何を目的として作られたのか。舒明天皇の時代に置いたのはなぜか。疑問は深まるばかりであり、加えて、その疑問に「人麻呂」が絡むことになる。

ここで五～六歌に添えられた注に触れておきたい。五～六歌

の位置付けを知る上で、この注は重要な意味を持つと思われる。

巻一、巻二に収める「雑歌・相聞・挽歌」集は独自の編集がなされており、歌集としてまとめられた後、二〇巻が編集される過程で、巻一、巻二に配置されたと考えていいと思う。五～六歌に付けられた注は、二〇巻に編集する過程で付けられたものと思われる。その注では次のように述べている。

右、日本書紀に検すに、讃岐国に幸すことなし。また軍王も未だ詳らかならず。ただし、山上憶良大夫の類聚歌林に曰く、「記に曰く『天皇の十一年己亥の冬十二月、己巳の朔の壬午、伊予の温泉の宮に幸す云々』（中略）」といふ。けだしここより便ち幸すか。

右のような注が付けられている（五～六歌に直接関係しない部分は省略している）。注を付けた編者は、記録にない行幸がいつ行われたのか推測している。このような推測をしたことをそのまま受け止めるならば、編者は五～六歌が舒明天皇の時代に置かれていることに、何の疑いも抱いていないことになる。しかし、果たしてそうであろうか。

編者にとって、万葉集の編集は万葉歌を振り返ることでもあったと思われる。万葉歌を振り返る時、人麻呂の存在、そして記載歌の完成は、最大の関心事であったに違いない。その編者が、五～六歌が記載歌であることに、しかも人麻呂の歌に見る言葉を用いていることに気付かぬはずがない。また、その記載歌が舒明天皇の時代に置かれていることに疑問を抱かぬはずがない。何の疑いも持たずに、記録にない行幸がいつ行われたのか推測することなど、あり得ないだろう。にもかかわらず行幸の時期を推測し、わざわざ注として添えている。それは何を意味するのか。この編者は、「雑歌」集の編者が七〇〇年代の初めの頃に作られた五～六歌を敢えて六三〇年代の頃に置いたことを承知の上で、右のような注を付けたのだと思う。つまり、虚偽の注を付けたのだと思う。虚偽と言うより、「雑歌」集の編者の目的とする所を受け入れ、その目的に同調したと言うべきかと思う。この注の存在自体がそれを物語っているのである。それは万葉集の本質にかかわる問題だと言わねばならない。但し、ここではその問題にこれ以上立ち入ることはできない。その問題に触れるには、新たに稿を起こさねばならない。ここでは、五～六歌を作った目的、またその配置は、万葉集の本質にかかわる重要な意味を持つことを、指摘するに留めたい。

五～六歌が人麻呂の歌を基としていることは、この歌の根幹を問い直すこととなった。その五～六歌と人麻呂のかかわりについて、もう一点指摘しておきたい。五～六歌は記載歌であり、五歌は整然とした文脈のもとに詠まれている。但し、一カ所だけやや無理を感じさせる所がある。記載歌の特徴として指摘した「かけの宜しく」と「かへらひぬれば」の関係には、巧みな工夫が施されていた。文脈の確かさを感じさせる表現であるが、その部分に若干の無理を感じさせる表現が見られるのである。それは「山越す風の　ひとり居る　我が衣手に　朝夕に　かへらひぬれば」という表現である。この部分の骨格だけを訳すと、「風が衣手にひるがえるので」となる。「風」が主格となってい

るのだが、風によって衣手がひるがえっているわけだから、「山越す風に　我が衣手の　かへらひぬれば」という具合に、「衣手」を主格とする方がすっきりすると思う。助詞の用い方にやや無理を感じるのである。

一方、人麻呂の「旅の歌八首」の中に、次の一首がある。

二五一　淡路の　野島の崎の　浜風に　妹が結びし　紐吹き返す

この歌は「風によって紐を吹き返す」となっている。しかし、情景としては、風が紐をひるがえしているようすかと思われる。その場合、「浜風の」という具合に、「浜風」を主格とする方が無理がないと思う。助詞の用い方にやや無理を感じるのだが、その点が五歌に類似しているのである。双方を対照させると次のようになる。

五　　山越す風の～我が衣手に～かへらひぬれば

←

山越す風に～我が衣手の～かへらひぬれば

二五一　浜風に　妹が結びし　紐吹き返す

←

浜風の　妹が結びし　紐吹き返す

五歌は「に」とするべき所が「の」となっていて、二五一歌では「の」とするべき所が「に」となっている。それだけでなく、五歌の「山越す風」に対して「浜風」、「かへらひぬれば」に対して「吹き返す」となっている。この対照性、また共通性は偶然のものであろうか。人麻呂の歌に基づいて作られた五歌に、人麻呂の二五一歌に通じる要素が見られるのである。

五歌の作者は敢えて二五一歌に類似した表現をとっているのではないのか。「山越す風に～我が衣手の」という表現であっても、調べの上でぎこちなくなるわけでもない。そこには何らかの意図が働いているのではないか。そう考える時、「かけの宜しく」と「かへらひぬれば」の構造が思い浮かぶ。掛詞を絡めて手の込んだ工夫がなされた表現である。その「かけの宜しく」は二五一歌の「吹き返す」にも通じているのではないか。類似した表現をとったのは、二五一歌に目を向けさせるためであり、そこに掛詞が働いていることを示唆しているのではないか。二五一歌は言葉のままに訳すならば、「浜風によって紐を吹き返す」の意となる。私はその場の情景から「浜風によって紐がひるがえる」と解釈した。しかし、この歌には、掛詞を活かして双方の意味が込められているのではないか。解釈するならば、「淡路の野島の崎に浜風が吹き、妻の結んだ紐をひるがえす。いとしく思う妻と逢うことはもはやかなわぬことだろう。この浜風に託して、妻が結んだ紐を返そうと思う。別れの時を迎えたのだ」という具合になるだろう。この歌は妻との今生の別れを覚悟した歌なのだ。その意味に気付くべく、五歌は類似の表現を活かして示唆しているのである。人麻呂作歌に基づく五～六歌に、人麻呂の二五一歌に通じる工夫がなされている。それはどういうことなのか。

五～六歌に詠まれた内容を振り返ってみたい。作者は都に帰ることを渇望している。夜ごとに妻を偲んでいる。しかし、行幸の旅は旅程のはっきりした旅であり、その期間は長くても三

〜四ヶ月程度であったようだ。その程度の旅で、このような思いを抱くであろうか。その思いは題詞を抜きにするならば、都を追放された人が抱く思いと言っていい。一方、二五一歌に詠まれているのは、妻との今生の別れを覚悟した思いである。双方の思いは通じている。六歌に見る「家なる妹」は二五一歌の「妹」と同一の対象としてとらえることができるのである。五〜六歌に詠まれた思いもまた、人麻呂の思いであろうか。

三

私は五〜六歌は七〇〇代の初めの頃に作られたものであり、それが意図的に六三〇年代の頃に置かれていると判断した。その判断を確かなものにすべく、根拠を求めてきた。そして、その根拠を見出し得たと思う。しかし、見出した根拠は新たな謎を生んでいる。それは五〜六歌と人麻呂の関係である。人麻呂は万葉集を代表する歌人でありながら正史には載っておらず、その生涯は謎に包まれている。その人麻呂が五〜六歌と結びつくことに、どのような意味があるのか。途方もない謎と言うしかない。しかし、私はその謎に一筋の方向性を見出している。

最後に、問題点を振り返って、その方向性を示したいと思う。

①、五〜六歌の題詞の設定や歌の配置等を見る時、作者は編者の一人であったと考えるのが最も自然だと思う。それは誰なのか。その人物は七〇〇年前後に歌人として活躍した人だろう。特定するのは困難だが、ある程度絞り込むことは可能であり、それによって、謎は新たな展開を見せると思う。

②、二五一歌を詠んだ時、人麻呂はどのような状況に置かれていたのか。二五一歌を含む「旅の歌八首」をたずね、そこに五〜六歌を重ねる時、人麻呂の晩年が浮かんでこよう。五〜六歌では暗号じみた方法によって人麻呂と関連付けている。人麻呂の晩年は公にできないものではなかったか。

③、この歌集の本質はどこにあるのか。五〜六歌は或目的のために作られた歌であり、人麻呂にかかわる内容を歌の背後に隠している。表層を行幸従駕歌としてカムフラージュし、その奥底に人麻呂に関することを秘めるという二重の構造を持っているのである。この歌に見る工夫は、他の歌においてもなされていると考えるべきだろう。その構造は万葉集自体が持つ構造ではないのか。万葉集の本質は、亡き人麻呂を偲ぶ所にあるのではないか。

右に示す①〜③は「万葉集とは何か」という問いに等しい。五〜六歌はその答えに迫るための関門と言えよう。なお、考察を進めたい。

参考文献

日本古典文学大系（岩波書店）
日本古典文学全集（小学館）
万葉集注釈（澤瀉久孝著・中央公論社）
万葉集必携（稲岡耕二編・学燈社）

（やまぐち・たかはる）